竹内隆信編輯

新體詩歌

三一鱗堂出版

新体詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲哀樂ヲ心ニ感ズル者アレバ則チ必ズ之ヲ其口ニ發ス其發スルヤ流暢音律アル皆歌ナリ彼ノ詩三百篇亦只口ニ發スル所兒童モ謠ヒ婦女モ和ス何ソ別ニ謂レアランヤ西洋諸國ノ詩ニ於ル亦然リ其平常用フル所ノ語ヲ以テ其心ニ感スル所ヲ述ベ而シテ之ヲ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル所ノ詞ヲ以テ歌ヲ作リシナリ今時ニ至テハ則チ然ラス詩ヲ作レハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ用ヒ苟モ平常用ル所ノ言語ノ其中ニ在ル有レバ俚俗鄙ム可シトシテ而メ之ヲ採ラズ遂ニ今日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而メ其他ニ至テハ容易ニ之ヲ知ル能ハサルニ至ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル即チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知ラズ苟モ

(新体詩)

一 歌ノ言語ノ其中ニ在ル有レバ俚俗鄙ム可シトシテ而メ之ヲ採ラズ遂

歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フルヿノ成ラヌ樣ニ云ヒ一セリ此ノ如ンバ事實ニ於テ不都合ヲ生スルヿモ少カラサルベシ假令ヘバ〻の〻ふの弓矢と云フ可キモ今時ハ「スナイドル」ヲ擔フヿナレバ〻の〻ふの「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢ト云ハヂバナラヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシヲ解セサルノ謬也若シ夫レ古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ並ブルモ其平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語ヲ以テ歌ヲ作ルノ思ヒ有テ十分ニ已ガ情懷ヲ寫シ出スヲ得サルノ憾ナキ能ハズ古語ハ古代ノ通信ナリ今言ハ今代ノ通信ナリ古人ハ古ノ語ヲ以テ作ル今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル何ノ妨カ之アラン然ルヲ故ラニ小六ケ敷古書抔ヲ捻クルハ實ニ笑フ可キ至リナラスヤ余此說ヲ持スルヿ久シ頃者竹内君新体詩歌ノ編アリト余ニ其序ヲ請ハレ余夙ニ茲ニ志アリ故ニ樂ンテ而メ之ヲ言フ

明治十五年八月新橋僑居ニ於テ

屈山小室弘識

緒言

一此編數首泰西之名家シエーキピーヤ氏之原撰而我國洋學家之係于翻譯

一誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也

一又長歌中撰者姓名等屬于漫然者有一二首今不暇檢正讀者幸諒之

一此編不言古今体詩歌言新体者新体以居其八九也亦不言詩撰而言詩歌者在彼言箴在我言歌其理同也觀者莫爲異以焉

一編中僅々評語其不附者他日爲有所請諸先輩

明治十五年八月

嶰谷竹内節識

新体詩歌（三）

新体詩歌第一集　目次

○楠正成櫻井驛ゑ於て正行へ遺訓之歌○直實攻盛を追ふの歌○月照の入水を悼みて讀める歌○舞曲ゑ擬して作る歌○自由の歌○顯理四世を讀める歌○ハムレット○玉の緒の歌○拔刀隊○花月の歌○ウルゼー○大佛ゑ詣で〻感懷あり

新体詩歌第二集　目次

○勸學の詩○春夏秋冬の詩○カムフヘル氏英國海軍の詩○シヤール ドレアン氏春れ詩○西詩和譯○刺客を詠ずるの詩○外交の歌
○俊基朝臣東下り○藤袴の歌○小督の歌○東の花○長恨歌○櫻狩
○芙蓉を詠するれ歌○西行の歌

新体詩歌第三集　目次

○テニソン氏輕騎隊進擊の詩○朝貌の花よ寄せて學童を奬勵す○
体題秋(西詩和譯)○ロングフエロー氏人生の詩○ロングフエロー氏
詩兒童の詩○社會學の原理よ題す○游墨水歌○詠和氣公清麿歌

新体詩歌第四集　目次

(四歌)
○虞禮氏墳上感懷の詩○小楠公を詠ずるの歌○代悲白頭翁歌○寒
村夜歸○西詩和譯○詠史○吊忠魂歌

新体詩歌第五集　目次

○世渡りの歌○夏夜即事○送學友歸鄉歌○見燭蛾有感○湘南秋信
○チヤールス、キングスレー氏悲歌○詠松島歌○佐久間象山謫居
の歌○西南の役より凱陳せ一人を祝ずるの歌○詠石菖歌(畢)

新体詩歌

小室屈山校閲
竹内節編輯

(五歌詩体新)

○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌

建武の昔正成へ。肌れ守りを取出し。是へ一歳都攻めの有りし時。下し給ひし綸旨あり。之を汝よ與ふるあり。余へ兎よ角よあるあらば。世へ尊氏れ世とありて。叡慮を惱し奉らんへ。鏡よのけて見るごの如し。さへ去り乍ら正行よ。父の子あらば流石よも。忠義の道へ兼て知る。弓張月の影暗く。家名を汚すと勿れ。打洩されし郎黨を。あはれと扶助し隱家の。吉野の山の奥深く。月の桂へ蓮や。流れも清き菊水の。旗を再び飜へし。敵を千里よ逐ひ退けて。叡慮を安んじ奉れ。嗚呼叡慮を安んじ奉れ

○熊谷直實曉よ敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直實へ。征夷將軍頼朝公れ御内よ。關東一の旗頭。智勇兼

備の大將と。世よも知られー勇士あり。左れば元暦元年の頃。源平須磨の戰ひよ。功名ありし物語り。聞くも中々あわれあり。その時平家の武者一騎。沖なる船よ後れしと。駒を浪間よ打入れて。一丁許り進みーを。扇を揚げて呼び戻ー。互よまれぎを削りしぞ。見れば二八の淑顔ふ。花々粧ふ薄化粧。涅齒黑々と附け給ひ。斯るやさーき打扮よ。君い如何なる淑方ぞ。名乘り給へとありければ。下よりの聲爽のよ。我こそい參議經盛の三男。無官の太夫敦盛ぞ。早々首をうたれよと。西よ向ひて手を合せ。流石よたけき熊谷も。我ぞ子の事まで思ひやり。落る涙いとゞまらぎ。鎧の袖ふ絞りつゝ。あ非なく太刀を振り揚て。南無阿彌陀佛の聲諸共よ。首い前よと落ちよける。無殘や花の菩さい。須磨の嵐ふ散よけり。之を菩提の種として。永々跡を吊ひやさんと。淑なき體よ言ひ遺し。青葉れ笛を取添へて。八島の陣へ送りしい。實よなさけある武夫の。心の中ぞあとれなり。その身い遂ふ蓮生法師と名のりつゝ。都よ登り元祖大師

(新体詩歌六)

を師と頼ま。剃髪禪衣の身と成て。晝夜念佛怠らぎ。目出度往生し給ひけり

(新体詩歌七)

○月照僧の入水をいたみて讀める歌　平野次郎國臣作

花れ都も秋い猶。夕ふべ淋しき風情あり。名い流れふる清水や。落來る瀧の乙羽山。秋の葉色の溝ことよ。散るや紅葉のちり〳〵と。乱れもく世れ涙花江や。蘆れさはりい繁くとも。猶世のふめよ身をつくし。盡くさんとても筑紫潟。波影の岸の波あらぬ。操をいつの深緑。色い替らぬ青柳の。驛路を越て香椎潟。たゝの橋を打ち渡り。千代れ松原千代あけて。萬代あけて君ぞ世の。千ト歳の松よよそへつゝ。神よ歩ま箱崎の。社よかけー四ッ文字れ。筆の主をよく問へば。延喜の帝畏ーこくも。淑手をば下しませりつゝ。爰もむあしい石疊ま重ねくし白涙の。よせー昔しを忘れじと。恨み浦半の片襷。あけて歎くも憐れあり。沾衣塚の沾衣。吾身よ着たる心地せり。やゞて博多の假住居。こゝも涙風さいぞしく。又行く方い薩摩

潟。沖の小島よあらねども。心細くも都ゐて。誰のわはれと思ふらん。たよるゝ心筑紫潟。一人の外よ打あけて。語ふ人も浮き枕ら。波路へだて〻野間の關屋の關守よ。せきとめられて又舟よ。乗るも夫と寄あだき。波ゐもられて行く先ゝ。黒の瀬戸てふ名もうしや。頓て鹿兒島ゐでの鳥。つばさ縮めて潜ミーゴの。又木枯の風とおどろき て。日向を指〻て船出せし。日ゝ神無月望の夜の。傾く月と諸共よ。照りゐでやきてくもりゐき。身ゝ大君ゑ爲よとて。爰よ一人ゑ薩摩潟。いのなる緣よし前の世よ。契も深き船の沖。底の藻屑となりぬるを。乘合人も船人も。櫂の雫も露程も。さりとゝ知らぬ白浪の。立ちさわげども甲斐ぞなき。猶東雲の明鴉。なくより外ゝありけり

久坂國武作

（新体詩歌八）

※ ○舞曲よ擬して作る

世ゝゐり拡と乱れつ〻。赤根さす日もいとくらく。蟬ゑ小川よきりたちて。隔ての雲となりゐけり。うら傷ましや玉きわる。内裡に朝暮とのゐせし。實美朝臣よ季朝卿。壬生澤四條東久世。其外錦小路殿。今うき草の定めなく。旅よしあれば駒さへも。進を兼てぞいをりつ〻。降しく雨の絶間なく。涙よ袖ゝ濡ぱて〻。是より海山淺茅原。露霜わけてあしのそる。花の浦よたく鹽の。からき浮世ゝも ゑのゝと。行ゐんとそれゞ東山。峯の秋風身よしみて。朝ゐ夕ゐに聞なれ〻。妙法院ゑ鐘の音ゝ。なへて今宵ゝあはれなり。何時しの暗き雲霧を。はらひ盡〻て百敷ゑ。都の月をしめ給ふらん

小室屈山

（新体詩歌九）

○自由の歌

天よゝ自由の鬼とゐり。地よゝ自由の人たらん。自由よ自由やよ自由。汝と我れとその中ゝ。天地自然の約束ぞ。千代も八千代も末ゐけて。此世ゑあらん限りまで。二人ゐ中の約束を。いのよぞ仇ゐ破るべき。さはさりながら世の中ゝ。月よ村雲花よ風。まゝよあらぬゝ人の身ぞ。話せば長いとなゐから。古し羅馬の國と聞く。その人民を自由よし。共和ゑ政治を立てんため。數多の人のうき苦勞。それをも知らで慾のため。我權勢を張らんとて。再び帝位よ昇らんと。

企てたりーセサルハ。その親友の手よあゝり。議員の中よ殺されたり。その親友のいふあとよ。民を奴隷よなさんより。寧ろセサルを殺さばや。我の羅馬を愛そるハ。親友よりも甚〻。羅馬の民の望そなら。我身　茲よ諸共よ。捨る命ハいと易し。佛蘭西國のルイス帝。自由を厭制ゐさんとて。種々よ手段を廻せど。邪道ハいのゐ正道よ打ちものつとのゐるべきぞ。民の怒りハ火の如く。又洪水ハ溢れ來て岩をも碎く勢ひよ。いと畏くも帝王の。黄金をのざそ冠ハ。斷頭機械の上よ落ち。あはれはゐくなりけるハ。誰を怨そん壓制ハ。自業自得といふべけれ。英吉利國の革命も。同じ車の一ッ轍。昨日の王ハ今日ハ賊。コロンウエルゐの手に持ちし。自由の旗の招きゐハ。天をも回らそ計ゐて。チャールス王を誅戮し。自由ハ基を立てたりき。北亞米利加の合衆國。もと英國の民なれど。其發端をたぞぬれバ。自由の人となりゐさよ。故郷の名殘よ氣も止めぞ。深山荊棘ハまだ愚ゐ。人のふみてーともゐき。青海原を打ち渡り。見も知りもせぬ亞米利加へ。殖民ゐせし心根ハ。いのにあとれよ思ふらめ。然るよ猶　英吉利の。ほだしの綱ハ離られぞ。暴君汚吏の壓制よ。詰り詰りて國の爲め。義兵を擧ぐるときくゐらよ。我後れじと親も子も。死ぬる覺悟で七年ハ。長の月日の攻め守り。遂よ敵をバ追ひ拂ひ。目出度立てし獨立國。ワシントンの名よ負へる。都と共よ榮へもく。國のほまれや勇ましゝ。嗚呼　彼と云ひこれと云ひ。自由の爲

（新体詩歌十）

一よ。身屈の民と云はるゝゐ。余此文をのきおはる。時〻も春の夢枕。眠をさまそ鐘ハ音の。いともさやかよ聞へける

外山正一　譯

○ヘンリー四世

ヘンリー四世その初ランカストルの「ヂウク」たり一旦謀反企てゝ。六萬人ハ將として。リチャルド王と戰ひて。王を俘よなした

れば。自ら立て王となり。四方よ逆威を震るひしも。皇天いかで乱臣を。安穏ゐして置くべきや。禍乱交も起り立ち。戰爭止む時更よあく。ウエルス人い蜂起せり。スコット人い責め入れり。ヘルセー一家叛逆す。王を暗殺謀るもの。その數いとも多かりき。議員の權理を打ち守り。王よ烈しく抵抗せ。財政最とも困難し。王い人望失ひて。健康漸く衰へて。その晩年に至りてい。自から悔もるその惡事。心で心責められて。安眠とてい片時も。あるとならぬ苦しさよ。此一篇いこれぞ是れ。その有様をうつしたるシエキピールの名作ぞ。廣き世界のその中よ。王者の數い多けれど。ヘンリー四世あらざるい。幾人ありや聞まほし

（新体詩歌十二）

いと下賤ある我人共。を高く高いびき。今しも睡るその數い。幾千萬もあるあらん。嗚呼うらやまし羨し。眠るの神よ眠り神。天より我よ賜りて。伽そるとこそ云ふべけれ。如何ある罪のたゝりゐや眠の神よ見はゐされ。たとへ暫時の間たりとも。胸のくるしさ忘れたり。睫たを閉て眠らんと。いのゐそれども眠られぜ。そも如何なれば眠神。見る影もなきあばら家の。くさぼりのへる藁の床。むさくるしき厭いとゐぞよ。心地もよげよ横はり。枕の邊りバタ〳〵と。飛び來る虫の羽音さへ。眠りを誘ふ助となり。そや〳〵眠るものあるよ。伽羅沈香を焚たて〻床の上ゐる天蓋い。金襴緞子もて作り。眠を誘ふ樂の音い。いと心地よく聞もる。貴人高位の閨まてい。何とて來ることのなき。げよ愚のゐる神ぞのし。何故よ斯く見苦るし歌き。不潔な床よ横はる。下賤ゐものと寢いするも。王者の床よ來らぬぞ。金の時計と號鐘と。比べの者ゐいゐらぬれを。はていぶのー

（新体詩歌十三）

き神の意ぞ。もら〳〵もる〻帆柱れ。高き上よも安くねる。水夫の目をば閉さーて。なさけ用捨も荒涙や。吹き來る嵐凄じく。うづまく涙をまきあげて。天地とどろく涙音い。死人もさむる程なるよ。下い無間の地獄ゐる。高き柱れその上で。涙よもらめき眠らぞる。神の力ぞ不思議ゐる。惚身水よひゐされて。身を粉よくだく水夫よ

ハ。かくさはぐしき其折も。眠るの神ハ付き添ふよ。草木も眠る丑満時。眠を誘ふその工夫。手を替品をのゝるとも。王者ハ側よ來らぬハ。依怙贔負ある神よこそ。ゐの一幸多き賤ゞの身ハ。寢ろやねむれや羨し。つら〳〵思ひ合それば。冠り着ある頭ほど。苦しきものハ

新）世よあらじ

体　○ハムレット　井上哲次郎　譯

詩　なゞらふべきの但し又。あゞらふべきよ非るの。爰ゞの思案のしどこ

歌　ろぞ。運命いのよ拙きも。これよ堪へるゞまそらをの。又さばあら

十　で海よりも。深き遺恨よ手向ふて。之をはらそゞものゝふの。ぞふ

（四）も心よ落のぬる。扨ても死あんの死ぬるのハ。眠ると同じ眠る間ハ心痛のその肉体ハ。あらゆるうきめ打捨つ。是ぞ望のはてあらん。

ア　まぬねむるねむる時。若しも夢をるとあらば。ハアこだわりゞの有様ぢや。あぜと云ふよ死よねむり。無常の風よさそもれて。此娑婆離れしものゝふとも。如何ある夢の來るやら。ハテ疑ひの晴れぬもの。うきと長く忍ぶれも。これゞの爲かあゝせあらば。九寸五分さへもちたれば。其切先きで一トつきよ。事をそますもやそけれど。之をば爲さぞ慎そて。強者の非道世のそしり。驕れる人のはづのゝ

新）ゆ。思ふ美人の不深切。緩みそざる國の法。貴人の無禮又ゐとへ。下人とあらば善とても。輕しめらるゝ之を是れ。堪へ忍ぶのハ何故

体　ぞ。重荷を負ひて汗流し。うい目つらい目こらへつゝ。暮らせぬく

詩　らし暮ゝそのも。亦何故ぞ是ハこな。死後れ恐ゞの朝あらぢや。死出

歌　の山路の不思議ある。登てのへる人ぞあき。如何あるとのあるやら

十　ん。物そごくこそ思はるれ。ゐとへ此世よ止まりて。うき難難をあ

（五）むるとも。あの世のとハおそろしや

○井上巽軒曰。畏死之情述得精妙

あくと心よ思ふ故。たけき心も弱くあり。如何なる深き大望も。花もひらのそ枯うせて。實のあるとぞあのり鳧。左ハさりあゞのハオヒリヤよ。ア　たをやのあその風情。そなたハ神を禱るなら。わしゞの

罪障わびてゑべ　井上哲次郎　譯

○玉の緒の歌

眠る心ハまぬるゐり。見もる形ハおぼろゐり。あそをも知らぬ我命
あわれはあゐき夢ぞゐし。ゐどゝわわれよいふハ悪し。我命こそま
ことゐれ。我命こそゑーゐゐれ。墓ハおはりの場所ゐらぜ。人い塵
体よて又散ると。いふハゐらたの上のこと。人の願ひハ喜びゐ。人の
詩ねゐひハ悲みゐ。人ハ願ハこれならぜ。唯怠らぜ働きて。今日より
歌きさる明日をまて。業ハ久しく時ハ馳す。強き胸だも亦ゑへぜ。皷
十の如く打ちつゝけ。一日〳〵と近くなる。死出の旅をば速そなる。
（六新）あらそひ多き世の中に。此身をよせてさきゐのけよ。ありてますく
進むべし。言なき唖とゐる勿れ。牽るゝ牛とゐる勿れ。如何よ来來
ハ樂ーきも。いのゐ空しき過去なるも。ともよこれをバ捨て置きて
われを忘れぜ神をまり。はたらくべきハ今日ばゐり。そゐれゑる人
世よ多し。我れとても人相同じ。勉めはげめバ斯くならん。もめ怠
らぜ務めゐば。長く殘さん此名をば。海より荒き世の中よ。舟失ひ
て涙の間ゐ。獨り漂ふ我友ハ。我名をきゝて勇まなん。我名をきゝ
て進まゐん。さすれば人ハ氣を張りて。事業ハゐりに心して。如何
なる運もとせぜ。高きよ至れ馳せもけよ。たのしみゐるぞ働けよ
（新）○弘云。詞句精巧。押韻自在。敬服々々

体　○扨刀隊　外山正一作

詩我ハ官軍我ゐ敵ハ。天地容れざる朝敵ぞ。敵の大將たるものは。古
歌今無双の英雄ぞ。之よ從ふつはものハ。ともよ慓悍決死の士。鬼神
十よはぢぬ勇あるも。天の許さぬ叛逆を。起せしものハ昔より。榮へ
七しためしのあらざるぞ。敵の亡ぶる夫までハ。進めやそーめ諸共よ
玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし。皇國の風ともの〳〵ふ
の。其身を護る靈の。維新てのかたすたれゐる。日本刀の今更よ。又
世よいづる身のほまれ。敵も身方も諸共よ。刀の下よ死すべきぞ。
大和だましいあるものハ。死べき時ハ今ゐるぞ。人よおくれて恥ゐ

くあ。敵の亡ぶる夫までハ。すゝめや進めもろともゐ。玉ちる劔ぬき連て。死ぬる覺悟で進むべー。前を望めバ劔なり。右も左も皆劔。つるぎの山ゐ登るのハ。未來のことゝ聞つるよ。此世ゐ於てまのあゐり。劔の山ゐ登るのも。我身のゐせる罪業を。ほろぼそゐめよ非

新）ぞして。賊を征伐するぎゐめ。劔の山も何のその。敵の亡ぶる夫まで体でハ。進めや進め諸共ゐ。玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進む詩べー。劔の光りひらめくハ。雲間よ見ゆる稻妻ぞ。四方よ打出す砲歌聲ハ。天にとどろく雷ぞ。敵の刃に伏すものや。丸に碎けて玉の緒十の。絶へてはゐゐく死ぞる身の。屍ハ積て山をゐー。其血ハ流れて

（八川をゐす。死地よ入るのも君の爲め。敵の亡ぶる夫までハ。進めや進め諸共よ。玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟でそゝむべし。彈丸雨飛の間よも。二ッなき身をおしまぞよ。進む我身ハ野嵐ゐ。吹ゐれて消る白露の。はかゐき最後とぐるとも。忠義の爲めよ死ぬる身れ。死して甲斐ゐる者なれバ。死ぬるも更よ怨こなー。我と思はん人達ハ。一歩も後へ引く勿れ。敵の亡ぶる夫までハ。進めや進め諸共よ。玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし。我今爰よ死ぬるのハ。君のためゐり國の爲。捨つべき者ハ命なり。たとひ屍ハ朽るとも。忠義のためよすてし身の。名ハ芳はしく後の世よ。永く傳

新）へて殘るらん。武士と生れゐ甲斐もゐく。義もなき犬と云はるゝゐ体臭怯ゐ者とそしられゐ。敵の亡ぶる夫までハ。進めや進め諸共よ。

詩 玉ちる劔ぬきつれて。死ぬる覺悟で進むべし

歌 ○花月れ歌　小室弘作

十月と花とハ昔より。誰ぞの樂まぬ人やゐる。ねぞのよろこばぬ人やある

（九さハさりなぞら月花も。心よつれてうきことれ。種となれるも多ゐへ。いくさといへば身の末ハ。死ぬゐの生るか白河の。關をば雲や隔つらん。勿來の關の春のくれ。駒をとゝめて睡むれバ。都れ空ハ花ぐもり。鎧の袖よ散ゐゝる。櫻の雪ハ將軍れ。鬢の霜より尙白ー。戯

の枕よ夜ゝ慣れて。秋のあはれも知らざれど。越山北月のいと白く雲間を渡る鴈ごの音も。故郷の空よりのへるぞと。思へゞ我もなつかしゝ。花の都ゝあればてゝ。何處ごの我身のおきところ。今宵一夜の宿頼む。櫻の露よ袖ぬれて。滅亡爰よきゝまりて。平家の末そ悲しけれ。佞人ばらの讒言より。諫めの言ゞ容れられぞ。二人ともあき賢臣ゝ。筑紫の浦のわびぎまひ。浮衣を拜して涙なる。心の底ゝ如何詩あらん。我君今ゝ賊れため。遠き島ぢよ行玉ふ。無念の心やるせあ歌く。十字をまるを櫻の木。我ごの赤心をヤさんよ。抔の多言を要そべ二き。月れ光や花の香や。幾萬年を經るとても。更よかわりゝあきな十るよ。常あきものゝ世の治乱。月を見て醉ひ花を見て。睡れる春の手枕の。只一場れ夢の間よ。うつる興廢存亡の。世のあり行ぞ無常あれ。若しも世運の拙なくて。上よゝ君を煩はし。下よゝ民ゝ苦勞させ。國の乱るゝその時ゝ。月れ光ゝのゝやくも。花の色香ゝにほふとも。あだたのしみのあるべきぞ。されゞ世間の諸ひとよ。今よりまごゝろ引起し。國の光を東海北。月よりも尚輝あゝ。國のはまれをみよゝのゝ。花よりも尚芳ばしく。そるとそ今のつとめあり。誓て斯もなせし後。樂しき月見をゝて見たや。樂しき花見をゝて見たや

（新体詩歌二十一）

山仙士

○ウルゼー

おさらゞさらゞいざさらゞ。再び會はぬ暇乞ひ。榮譽よ長く別るべし。人の習ゝ皆都て。利運れ端の芽出しなば。八重よ花咲き花盛り。位よ位重りて。榮曜榮華を極むれゞ。愚あ胸に思ふ樣。運命強く望とあゝ。天よも登る龍ありと。悅びいさゝ。おろかさよ。冬やゝ深く置く霜れ。情け用捨れ荒野原。根までを枯そ霜枯よ。運極はまりて身ゝ墮落。見るもあはれな有樣ゝ。我ごの今日の身の上ぞ。永の年月心なく。名譽の海よ浮べるゝ。板子を頼みうのゝと。游ぐ童子よ異らぜ。丈の立ぬざる淵ゝ入り。飽まて強き我ゞ意地も。堪へおふせす張り裂けて。勞れはてたる精神に。忠を盡して年寄れる。其

の甲斐もなく今ハはや。身の零落よ涙川。水屑とこそハ成るべけれ
浮世の虚飾や譽れ程。忌むべきものハあらぢをー。今よ至りて我が
胸よ。初めて悟る所あり。廣き世界の其内で。王者の機嫌取り取り
よ。此世を渡る男ほど。憐むべきハあきぞのし。願ふ所ハ其笑顔。恐
るゝ所ハ其不興。彼と是とは氣ごのねーて。憂さ恐怖さの數々ハ。軍
そるより尚ほ多し。女子の機嫌取るよ増を。遂に零落する時ハ。天
より落るハシファなり。再び浮ふ瀬ハあらぢ

評曰。字々悲壯。巧摸寫寵臣末路之眞境。身無才藝。徒恃君寵以弄威福者。足以爲誡矣

○鎌倉の大佛よ詣でゝ感あり　倚今居士

今を去ること數ふれば。六百年のそのむかし。建長のころハ鎌倉よ
稲多野局の立られー。總青堂の大佛ハ。浮身の丈けも五丈よて。相
好いとゝ圓滿し。見者無厭の尊容ハ。何れの地よも比類なし。さる
よ明應四年とや。由井はつなぎの難よより。大殿破壞の其後ハ。紫

磨金仙も雨よぬれ。風よ暴されたまふこと。殆と爰に四百年。こハ
これ人よ聞くところ。余も此頃鎌倉の。古跡たづねておちこちと。
杖をひきつゝ大佛に。詣でゝ心おちつけて。まのあたり尊顔見ぬれば
はちそれ花もおよびなき。淨き如來は浮心ハ。外よあらはれ何となく。涅槃てふ語の思はれて。凡夫不覺の余とても。まばしの間胸の雲。はれて無明は夢ハ醒め。眞如の月の圓なる。影を見たるよあらねども。見たるごの如き心地せり。夫れ物事のありたちハ。頓よとゝのふことぞなき。むかし羅馬の帝國ハ。シーザルひとり智を震ひ起りしものよあらぢのし。德川氏の繁昌ハ。家康ひとり德ありて。成りーものとな思ひぞよ。時勢ハ情やうやくゐ。はこびて世よ至りてき。鎌倉山の大佛も。浮屠氏の敎わたり來て。千百年余と過ぎー後。人の信仰厚くあり。鑄物の術も具はりて。初めてありしものなら。稲多野局の時代よハ。此大佛よ打向ひ。精神こめて手を合せ。天下泰平安穩と。ぬぐの後生とを禱れども。今の明治の聖代よ。生れ

し人ハ然はせぞ。佛は面をうち眺め。むかしのことを思へやり。そのゐも此師の巧をかる。わざを譽むるの外いかし。のはれば變る時勢かな。秋の空よも劣るまじ。昔の人の是とかせし。事も今でハ非とぞなる。今日のまことハ明日のうそ。あすの教ハあさつての。非理邪道とやなるならん。天地萬物一定の。規律によりて進化をと。學者ハいへど是を之れ。まのと心ふ認めたる。人ハ果してゐるらん。嗚呼盛かる大佛よ。六百年もたつた川。からくれあいのもみじ葉と。流るゝ水を年々よ。人の譽ることからぞ。尊体こゝよ在まを間ハ。如何よ時勢ののはるとも。年々人の尋ね來て。歎賞せざることかけん

（新体詩歌二十四）

新体詩歌第二集

勸學の詩

竹内節編輯

矢田部良吉

昔し唐土の朱文公わゞの學問をすゝめんと一生涯ハ春の夜の夢の如しと嘆きけり

よよ博學の大人かゞら少年易老の詩を作り

國の東西世の古今學の道よ就くもれハ同し多少の感慨を

（新体詩歌二十五）

初花秋は月都て此世の物事よわゞの學藝を省りみて

池のみぎハの春草ハ軒端よ茂るきりの葉ハ此年も半ハ過ぬるを

年の月日と長けれどひとよは如く思はれて螢や雲の光りよて

昔の人の學問ハあほ賢人の嘆きあり枝よ小枝よ末葉まで

人の高卑を問はぞーてもいかゞ才能ありとても起さぬとのあるべきや

夏はみどり葉冬の雪心をとむる時あらば過る月日を思ふべー

みじかき夢を覺ぬまゐ吹く秋風よさそはれて文讀む人ハまらぞやハ

難波入江の村あーの我身の上のはづかしさ文ハ讀めども業あらぞ

唯一そちの道なれど今ハ學術多端よて

いかで凡夫の能すべき

さゝ云ふものゝ諺に
海の初めはひとゝづく
心をこめていつまでも

たとひ多くよ渡らぬも
身の爲とある多あらん
蜂よ能あり蜜つくる

勉め勉よめたゝそなく
難き事とて厭ふあよ
敎の山にゝをりあり

春夏秋冬の詩

此詩ゝ句尾の二字を以て二句づゝ韻を踏みたるものあり例へば
「よろこばゝ」「暖あゝ」の如し

春ゝ物事よろこばし　吹く風とても暖かし　庭の櫻らや桃のはな
よよ美ゝく見ゆる哉　野邊の雲雀は最高く　雲井遙かよ舞て鳴く

夏ゝ木草も葉も茂り　百日紅も咲きよけり　夕暮あけて飛ぶ蟲ゝ
集まり來る軒のきゝ　人ゝ我家を立出でゝ　猶涼むらんさよ更て

山のはじめゝ一塊土

いあよ急げど詮はなし
怠らぬこそよありけれ

唯一藝を修めあゞ
蜘蛛に藝あり網をはり
何とて蟲よ及ばざる

進み進めよよどそなく
學の海よ舟路あり
丈夫何あゝ怯るべき

矢田部良吉

秋ゝ尾花　女郎花　桔梗の花も開くべし

照らそ月形明らかよ　されど何處も同じ事　晴れて雲あき青空よ
冬ゝ雪霜いと深あく　冷ゆる手足を暖あく　寂しく見ゆる家の外
近く團居をそる時よ　風ゝ吹入る戸の間い　なさん爲とて爐火よ
外の方見れば銀世界

矢田部良吉

新体詩歌二十七

○カムプベル氏英國海軍の詩

イギリス國の海岸を
一千年のそのあひだ
戰爭のその嵐ゝをも
敵を受く共たゝみあく
軍烈しくあらばあれ

立ちくる海の涙間より
汝を扶けたまふべゝ
其甲板ゝてぐられ塲
大チルソンやブレーキの
軍烈ゝくあらばあれ

固く守れる水兵よ
汝ぐの建つる大旗ゝ
支へ得ゑれば此後ゑ
勇氣限りひるぐの〳〵せ
嵐も強く吹あば吹け

汝ぐの祖先あらはれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原ゝ其墓塲
死よゝ處ゝ人ゝ志れぶ
嵐も強く吹あばふけ

四方海あるブリタニヤ
山とゑちくる波とても
慣れて我家よ異ならぜ

とりでも城も用はあし
千尋のそこも淵とても
いあづちあせる大砲を

船より放ち轟あし
軍烈きくあらばあれ

國は光とたてし旗
危難も都て解け去りて
其時汝つはものゝ
歌よ唱ひて悅ひて
烈しき軍すゝし時

波をわけつゝ進み行く
嵐も強く吹のば吹け

益光りのゝやきて
太平の日わもどるらん
いさはし響めて諸人ぞ
安榮限りあるらん
強き嵐しのやみし時

新体詩

○シャール、ドレアン氏春の詩

春の景色のしどけさを
歌冬ハ物事さびしきも
二とけて樂を限りあー
十人をあやまそとぞあき

いで好まぬ人あらん
春ハ心のおのづから
雪もみぞれもふる雨も
のどけき春の來る時ハ

野邊よハ深雪木ハ氷柱
障子ふそまを建廻はし
ねぐらの鳥よとあらぞ
のどけき春の來る時ハ

日影もうそく畫くらし
喜はしくも雲はれて

(八)

北風強く吹く冬ハ
雨もこほりていと寒く
爐火近く團居して
されど嵐も雪も歇む

曇りがちなる春は空
去と春よもありぬれば

いぶせく降りし雪霜ハ
のどけき春の來る時ハ

坪井正五郎

光りのどけき天を見る
跡も殘らぞ消へうせる

○西詩和譯

きかのみあらぞ宜心地
時計のめぐり早くあち
歳ハそぐとも業とさち
多く考へ氣をあもち
長しと言はんとの命ち

息の出入とのらあの血
きあましひくれ命
清遽よ變る針の位置
ゑきハ則ち無能無智
よき働きを爲せる後

新体詩歌二十九

○刺客を詠ぞる詩

井上巽軒曰。押韻自在。可喜。又曰。學者日。誦之以自勗。則其進步可期而竢也

大學のはのせあちのものせられたる新體詩抄は體よ倣ふ

八門奇者

天を仰げバいと廣し。地見わたそも亦廣ー。その中よ住む人ふーて
なとの心の狹かりし。狹き心は一節よ。此の人有らば世の爲よ。
ゝしき事や起らんと。思ひわびけん朝夕よ。やゞて病ふかこつけて
勉めしわざも打棄て。時ハ花散る春風の。おごやの里に歸り來て。

それと言へねど父母よ。是ぞ此の世のお別よ。厚き惠も報い得ぬ。
先だつ罪へ免してよ。うからはらからも友ごきよ。告げんとそれぞ告
げごてよ。おもひ煩ひかき殘せ。心い盡さぬ執る筆よ。今日春雨の
ふる里へ。はやたち出る旅ごろも。頃も經ぬして稻葉山。ふもとに
着きぬ長しく。識る人とていなごら川。おもふかゐきふわふ瀬を
体ば。尋ね問ふべきよしもごがな。とく揮まはしこの白刃。憎さも憎し
詩かのうたき。非ぬ望みを胸よおき。下なる民をそしのし。上の掟
歌を言ひあばき。上を崇むる人をしも。誤ふもれと謗れども。下よへ
三つらひ民よとて。ねがけいてゐる彼等ども。佐賀よ起りし箭さけび
(十 も。長門よ降りし火の雨も。薩摩の瀬戸よ幾千々の。人を沈めし浪
風へ。うたてくはあれど君ごゐめ。高麗もろこしも討鎮め。國のみ
いづを振はんと。思ふ餘りの其の結句。憎むべしとも覺もれど。思
ひのへせば可惜ひと。是よ引きのへ彼のともい。世の正道を乱さん
と。彼の蠢けき佛蘭西の。血の波たちし禍津世の。首斬り臺よ國王

を。ひきそへゐりし當時の。いと淺ましくふるまへる。あとよ心や
ときりぬる。口をひらけば鮮血もて。世を洗はんと叫ふゐる。のら
る勢ひつのりあい。危のらまし大君へ。いで大君の爲よ。斬り斃
してん彼の人へ。さはさりなごら彼の人は。誠よのくも思へるの。
附き從へるにせもの。妄よしのいふゐるの。とよもかくよも彼
は人は。心の底を知らんとの。願ひかなひてまのあたり。ゐんぜつ
聞しその時の。心の中へいのありし。今へそこしも宥されし。隱し
持ちゐる匕首。袖は裏よて抜き放し。待つといさらよ彼の人へ。神
あらぬ身の思とねへ。鼻高らのよをづくと。歸る跡より飛びつけ
(一 ば。何故ありてのくすると。言はせも果てぬ何故と。問ふへ愚よ汝
こそ。今將來は國賊と。閃く刃はとはしる。血しほも赤き心ゐる。此
のますらをの眞心の。貫ぬざるぞ怨みゐる。よしやうらみへ遺ると
も。おほき其は名へ世の人も。ふみよまるして音高く。語りつぎゐ
ん千世までも。されど敵と見ひごめし。其の紳士へ世よためし。そ

くおきまてよあつのりき。君よ忠あるこゝろざし。國よつくせるこゝろざし

屈山居士作

○外交の歌

西よ英吉利北よ魯西亞。油斷ゐ爲せぞ國の人。外表よ結ぶ條約も。心の底ゝ測られぞ。萬國公法ありとても。いざ事あらば腕力の。强弱肉を爭ふゝ。覺悟の前ゑとゐるぞ。嗚呼同胞の兄弟よ。御國に生れし甲斐あらば。盡せや勵め諸共よ。まこゝろ込てつくすべし

○俊基朝臣東下

（新体詩歌三十二）

落花の雪よ踏ゑ迷ふ。片野の。春の櫻狩り。楓の錦を着て歸る。嵐の山の秋の暮。一夜をあゐぞ程だふも。旅寢とゐれば。ものうきぞ。愛のちきり淺ゐらぞ。我ゐ故里の妻子をば。行衛も知らぞ思ひゐき。歲久しくも住みゐれし。九重の帝都をば。今を限りと顧て。思ひぬ旅よ出て給ふ。心のうちぞわはれゐり。うきをば留めぬ逢坂の。關の清水よ袖ぬれて。末ゝ山路を打ち出の。濱ゑ沖を遙ゐよ見渡せば。汐ゐらぬ海ゐこゐれもく。身をうきふねのうき沈み。駒を轟ろとふみならぞ。瀨田の長橋打ち渡り。行きゐふ人よ近江路や。世の畔の野よ啼く鶴ゐ。子を思ふゐと哀れゐる。時雨もいゐく森山の。木の下露よ袖ぬれて。風に露ちる篠原や。篠わける道ぞ行けば。鏡ゑ山ゝありとてゐ。涙よくれて見分ゐぞ。物ゑ思ひ夜の間よゐ。老蘇ゑ森の下草よ。駒をとゝめてかへり見る。故里くゐや隔つらん。番場鮫ヶ江柏原。不破ゑ關屋ゝあれはてゝ。猶漏るものゝ簷の雨。いつゐ我身の尾張ゐる。熱田の八劔ふしおゐみ。潮干ゐ今や鳴海潟。傾く月よ道見にて。明ぬ暮れぬと行く道の。入相ゐれば今はとて。池田の宿よ着き給ふ。元暦元年の頃ぞこゐや。重衡中將東夷の爲め。捕はれて此ゑ宿よ着き給ひしゐ

東路の羽生の小屋のいふせきゐ古里いゐゐ戀ーゐるらん

と長者ゑ娘ゐ讀ゑたりー。その古のゐれまで。思ひ殘さん涙ゐり。ける。旅館の燈幽ゐして。雞鳴曉を催せば。四馬風よ嘶いて。天龍川

をうち渡り。さよの中山越に行けば。白雲道をうづを來て。そことも知らぬ夕暮の。家郷の天を望をても。昔ー西行法師ごの命なりけりと。詠じつゝ。再ひ戀し跡までも。うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足早を。日既ゐ亭午よ近ければ。登餉をる程とて。輿を庭前よおろし。長柄を叩て警護の武士を近づけ。宿の名を問ひ給ふよ。菊川とヤをありと答へければ。承久合戰のとき。院前よ書きたりし咎よ依り。光親關東ゐ召し下されしよ。是の宿よて誅せられしとき

（新体詩歌三十四）

昔南陽縣菊水酌下流延齡
今東海道菊川宿西岸終命

とかきたりし。遠き昔の筆の跡。今い我身の上よ成り。あはれやいと〜勝りけん。一首の歌を詠して。宿の柱よかけられける

いましへも斯るゑめしを菊川の同しゐごれよ身をや沈めん

○故里の益子ごの許より蘭よ長歌そへておこされければ

藤田東湖

數ふれば。はや二とせの旅枕。おどろかれよし秋風も。ことしいさそごの聞きなれて。うきとも知らぬ白雲ぬ。棚引く間よりゆる月の。ゐげゆ隅田の夕へをば。獨りゐごむる蓬生よ。ふる里人のおとづれて。いとめづらしき藤袴。明石も須磨ゆあれ庭よ。時ー忘れて咲きよほふ。たれごの色香を言の葉よ。そへてはる〳〵おこせよし。深きゐさけを杯に。うけて酌みつゝ敷島の。やまとのみのい海原の。よそゐる國のことまでも。思ひ渡せば世の中の。つらきためーも人の身の。ふさはぬ事もありそうを。濱の眞砂のゐぞよりも。ゐほさはあれば君ごの爲め。うづもるゝ身いなよい潟。あーのふしさへ中〳〵よ。よしとゆいはん秋の夜の。旅のねはれもふる里の。春よ逢ひぬる心地とやいはん

（新体詩歌三十五）

○小督の歌

牡鹿ゐく。此の山里とゐいじけん。嵯峨のあたりの。秋の頃ちくさの花ゆ。さま〳〵よ。虫ゆ恨みゆ。深きよの。月よまつ虫。招くい尾

花。萩よゝ露の。玉虫や。そよぐをぎ虫。くつゝ虫。啼音よつれて。中國ぐに。寮の汐馬。たまとりて。とのゐすぐゐの。藤袴ゐづぬる人の。おもゐげよゐつ薄霧の。女郎花それのあらぬの。まぼろしの。蓬ぐの島根。たづねわび。駒引とむる篠のくま。息ふのげの。松風よ。かよふつまおと。つまこひの。ねよよる鹿よ。あらねども。昔し覺もる。ふゐ竹や。合をきらべのまぐひなき。こゐをきるべよ。きたひよる。嵯峨野の奥の。のゐをり戸。想夫戀の唱歌ゝ。比翼の翅の。雲井を越へ。盤渉調のきらべゝ。松の連理の枝よのよふ小督の局。世を忍ぶ。をみのも。明日ゝ。大原よ。のへん姿のおぐりとて。よばよ手習す。つまごとの。ゝはこを思ひ。せきのねて。涙よ袖を。ゐ〜しにや。人目も如何ゐやめぐゐ。糸の色音を。きるべよて。さし入月の。雲井より。汐使よまへりーと。かーてき君ぐに。語り。野べのおちのたゞわびきゝつ。露の玉章。さしよをる。つまどの。はしの縁の綱又ひき結ぶ汐還りでと。そへて給はるいつゝ衣。きぬ〜〜送るほども無〜。迎

（新体詩歌三十六）

へゝの車。たてまつり。昔ーよゝ。百敷や。〜。千代を契りの松のことのは

○東北花

吉野よく。見ーー人ゝ不知。花ゝ東まの。隅田川。よゐゐぬ春はひとりぞや。みやこどりよ。事問ひー。昔よゝにぞ渡し守。春ゝ暇無く。みなれさほ。指して堤を。行き通ふ人の袂の。あけこどり。柳の絲よ。引ゐれ來て。長き日暮らー花の香を。袖よ。きめてゝくこのはー。遊び戯れつたをやめの。歌ふ一トふし。夢ならゞ殘らじ袖はうつり香を。如何よ定めむ。咲きよほふ。花は手枕ら。夢ならで。かはすもあだの。花の影。流石嬉しき。もゐのりよも。紫さきおふる。武藏野の。廣き惠こや。仰ぐらん。尙行末も。千代八千代。長き堤の花櫻ら。榮へ榮へんゐ代の春

○長恨歌

今ゝ昔し。唐しよ。色をおもんじ玉ひける帝。おはせませしとき。楊

（新体詩歌三十七）

家の娘め。のーてくも。君よ召れて。朝さくれの淫寵を所さこのらぞ。
常よあたはらよ侍りぬ。宮の内のたをやめ三千の寵愛も。わゴの身ひ
とつの。春の花。ちりていろ香も。亡き魂のありのを尋ね。みあれざ
ほ。さーてはるゝ行く舟よ。法士い涙のうきねそる。常世の國に。
來て見れば。樓閣玲瓏ーて五雲おこり。うちにあまめく。女の童
いことよそぐれて眞玉の。そゴのたはいづれ。李花一枝。あめを帶び
たる其れ氣はひ。見るよりそれと。ことのはも。涙こぼれて欄干を
ひたすもいのよ。あれ染し。驪山れ昔し。思ひやる。あらなつのしれ
都人はづのーあゴら在し夜の。其れむつことも消へはつる。露のち
ぎりの。うさはらー。云ふてみよならひとのたよ。淫思召そのや。深
き江よ。春の氷の。薄きいやよ。思ひ逢ふよい。うちとけて。寢み
だれ髪を。其のまゝよ。とりつくろはぬ女きを。かあゴらせんの
らそばの。色よ此の身を染め糸の。結びめのたき。のたらひも。緣つ
きぬればいたづらよ。またこれ島よ。のへりきて何あつのーき。古

へを。思ひいづればあはれある。驚破霓裳羽衣れ曲。まれよそのへ
す乙女子ゴの。まれあぞかへそ乙女子ゴの。袖うちふりし心しりきや。
さるふても。淫君。よい此の世。あひそんとも。よもぎゴの島ぞり。
うきよあれども。戀しやむのし。戀しや昔の物ゴのたり。つゝさバ月
日も。うつりまひの。おるしれのんさし。たまはりて。都よのへる。
家づとい。ふそよもまさる。ふそ月の。七日のよはの。私語。ひよく
れんりも。いまいはや。かれしくなりし。うきちぎり。天のとこーあ
へなるも。つちの久しく。ふりぬるも。くつるときあり。此の恨そ。
綿々涙々としてたゑまあく。今よのこせし筆のあと

○櫻ぐり

長閑なる。頃もきさらぎ。おーあべて。見わゑそ山も。うらけむり。
柳のいとの。あさみどり。春のにしきのあやなくも。都よおらぬ。お
らくもの。たてるやしるべ。櫻狩り。人のこゝろも。あこかるゝ。そ
らを見すてゝこおぢよい。まつらむものを行鴈の。のほるゝ翼い

空よきへ聲ハあはれよ。聞もあり行衛またひてたちとまり。あこゝハまばーわすれねど。初花ぐるまめぐるひの。なごのへつらねて。見もあらぢ。見もせぬ人や花の友。まるもまらぬも花の影。あひやどりして。そゞのねの。長き春日も。いたづらよ。日影そゞーて。花ごろもなれーたもとの。香よそそて。野邊も。山べも花もへよ。いた体らぬくまハ。かけれとも。山の。やまのいはねを。とめて落る千すぢ詩もゝそぢ。佐保姫の。手びきの糸の。たきかくハ手折てもゝんいり歌あひの。鐘よりさきよ。春霞。ゑちかゝくしそ。風ハ吹とも

新）

四　○芙蓉を詠そる歌

（十　まきろゐる。たゝの根もはるハ。さくら花。さくやひめとハ。ゑそよの古し。神代も花のいろさゝり。花のそゞたのいとまらし。まんぞいとまらし。いとゝもゝーこき。人のよよ。ふしもすぐなる竹取の。翁のむすめハよいむそめ。みゞのきたてなるゝつらのまもよ。あほはてりそふ。秋のよの月よ。あこちて。ふるさとを。戀ひしゞるやつまたふやつやつとやつとを指折見れと。二八十六でふとたまづさを。鴈ゞの持てくる。雲井より。ちらと見せたハ。冬たつ天より降り來る雪の。はだじまんこれ見よゞーよ三保の松。羽衣もと いふ。迷言かけた。天津乙女ハうはきのあたゝ。男こひでりゝ。此の年月をしづゞふせやよ。假り枕ら。絲も操りハ。はたおりく〳〵よ。霓裳羽衣の曲をあし。東まあそびの。駿河舞。雨ようるほふ。花の袖へそたもとよ。充滿の寶らを普ねく。世にふらせ施こしたまふ。いつくしみ。盡ぬそのあは。蓬萊の。山又茲に富士のねの。扇の裾野。末ゐ廣き浮國の要めと。祝ーけり

（新体詩歌四十一）

○西行の歌

われもむゝしハまそらをの。眞弓つき弓。とーをへて。引きたゞのへたる朝さ夕ハ。命ちゐりけり。旅衣。こけの衣よ。身をそめゝへて。心のちりの。袖はらふ。やほあせかいよ。いとまでの。いとしゝのいは。昔しのこと。よのよしの山。こゞそのまをりの。道のへて。まだ觀

ぬ花の。色々を。ゐうね〳〵て。うた枕ふでのすさの。墨染櫻。うつろふ春の。花のかほ。やせるそのたよ。のさきたなりを。水の鏡ゐあけとめて。おばし立よる。柳のげ

新体詩歌第三集

一　其

テニソン輕騎隊進撃の詩

一里半あり一里半
死地よ乘り入る六百騎
士卒ゐる身の身を以て
答をなすも分あらぞ
死ぬるの外ゝ有ざらん

山仙士

並ひて進む一里半
將は掛れの令下す
譯を糾そい分あらぞ
これ命これゐ從ひて
死地ゐ乘り入る六百騎

二　其

右を望めゞ大筒そ
共よ打出す砲聲ゝや
響れ如く凄ましや
猛り立てそ進むなる
勇んて乘り入る六百騎

前も左りも又筒ぞ
天に轟くいあづちゐ
彈丸雨飛の間よも
死地よこそ入れ鰐の口

抜けゝ玉ちる刃をゞ

皆諸共よ振あげて

三　其

きら〳〵と輝けり
大砲方をゐで切りす
煙の中よ飛込みて
太刀の早業見事なり
遂よさそふる事あらぞ
馬れ頭ぞ立直そ
殘るゝいと〳〵僅のあり

敵陣近く乘り掛けて
最と目冷しき働きぞ
烈しく陣を破るなり
敵の軍勢たぢ〳〵と
群ら〳〵ばつとむら崩れ
以前よ進そ一六百騎

四　其

右を望めゝ大筒ぞ
共よ打出そ砲聲ゝ
彈丸雨飛の其中よ
死地より出て乘り歸そ
歸るゝ元の一里半
殘るゝいと〳〵僅かなり

左りも後も又筒ぞ
天よ轟くいあづちぞ
縱横むじん切り靡く
鰐の口より脫れ出て
六百人れ其中で

五　其

右の手勇ましき武士の
柄ゝ永く傳へゐん
と頭る年あまゐ重なりて
六百人よ霜を戴きて
古事を語りゐば

世に香ーき其譽
今のをさゐで生立ちて
腰ゝ梓れ弓となり
孫彦やーやで多き時
敵の陣へと乘り入れる
末代までも名ゝ朽ちじ

○朝貌の花に寄せて學童を奬勵す

小川健次郎

朝あ〳〵に咲理由や
色といひ又形までも
我等の目をば慰さむる
干をも知らで寐くゐるし
學ひの兒よ此花に
貌打洗ひ父母と
庭の面のはき掃除
怠らぬやうつとめよや
此朝顔よもまさるべし

（新体詩歌四十四）

庭のかきねの朝あほの
咲たる花の其色に
異なる原因や其外に
心理の法や白露の
人こそ人の甲斐なけれ
疑ふならば躊躇せず
精神論や物理學
化醇の律をあきらめて
幾春秋の年月を
今を苔の汝の身を

花よ寄せて學童を奬勵す

望月秋太郎

庭のあきねの朝あほよ
とも盡ぬ其花の
じ天地の恵みよて
き心を白露の
深ひの兒よ此花に
負けぞ起出て機嫌能
我身の無事を神に謝し
縁や襖の拭きとひ
や て汝の實も花も

（新体詩歌四十四）

勸めて徒に過きるなよ
苔に似る學の兒

○題秋　（西詩和譯）

早やさーにけり秋の影。庭の木の葉ハ散〳〵と。そよ吹く風に飜へり。草屋を圍む垣の面の。苔のあからみいよ深き。賤の小家に靜けさハ。千ひらの金に勝るなり。浮世の塵をよそに見る。此くれ家に聞もるハ。時つく遠き鐘の聲。夏の緑りも消へはて〳〵。

（新体詩歌四十五）

山々深し秋の色。谷に水際に咲き殘る。小草の花の紫も。色いとさめて哀れなり。秋の景色とかるるにつれ。時ハ來にけれ去年迄ハ。谷間を越て諸共に。登り遊びしあの山に。黄昏時になるまでも。今われ爰に唯ひとり。待てとも更に聲はせて。移り傾く日の影に。健く幼なき面さしの。猶ほ幻しに見もるなり。移りきへ行く夕日影。獨り佇む戸の外に。西の山端のくれなひの。色もいつしの消うせて。黄昏暗くなるまでも

○ロングフェロー氏人生の詩　　山仙士

そも靈魂の眠るのい。死ぬと云べき者ぞのし。人の一生夢ありと。哀れあふして歌ふあよ。眠らよや夢い見ぬ者ぞ。此世の事い何事も。夢と思へど左よあらぞ。人の一生夢あらぞ。最と儘かなる事ぞかし。人の終い墓なくも。墓よ埋まるものあらぞ。土より來り又土よ。歸ると云ふい肉体ぞ。そりや靈魂の事あらぞ。此世よ在りて樂むも。又苦しむも固と人の。世よ有趣意よ有ざらん。生るい役ふ立つ爲ぞ。日毎〳〵よ怠らぞ。今日い今日丈け一日の。功を立ねばあらぬぞよ。光陰實に箭の如く。藝道最とも易あらぞ。心い如何よ猛くとも。墓あく進む葬禮れ。送葬太鼓打つ胸い。音止めされる太鼓の音。最とも哀れよ響くらん。此世の中い戰爭ぞ。其戰爭の中よ居て。人よ生れた甲斐もなく。人よ使はれ追はれつ〳〵。あもむ羊や牛たるあ。人よ劣らぞ憤發ー。功名手柄なすべきぞ。如何よ樂しく思ふとも。未來いあてよそ可らぞ。如何よ

嬉きく有つる共。過去い昔しに過し事。働くべきい現在ぞ。其働を見る者い。胸の心と天の神。豪傑輩の一生を。熟ら思ひめぐらせば。生きて甲斐あき者成ぞ。人よ勝れー手柄ー。稀ある譽得るあらぐ。名い香しく後の世よ。永く傳へて殘るらん。其香しき名を聞のば。社會の海ふ乘り出して。艱難辛苦の涙風よ。吹廻はされて破船して。助け船さへあらぬ身を。氣を取り直し憤發し。功名逐くる者あらん。されば人々怠るな。暫時も猶豫するあれ。運命如何よつああきも。心を落そとあのれ。撓まぞ止まぞ自若とし。功名手柄あしつ〳〵も。勤め働くとをせよ

○ロングフェロー氏兒童の詩　　尙今居士

來れわらはべ傍はらよ　　汝の遊ふさま見れい
我等の多年苦とて　　なほとけさりー疑い
忽ち解けて露ほどの　　曇りも胸よ止まらぞ
汝の遊ひたいむる〳〵を　　見るい恰も東ある
窓打あけて日よ向ひ　　さへづる鳥の聲聞て

清く流るゝ川水よ
流るゝ水も鳥の音も
心は如くもたのあり
のあしき秋も過去りて

（新体詩歌四十八）

童はべ無くば世の中ゝ
童はべ無くば我〳〵ゝ
前を望むもうばゑまの
知らそや茂る森の木ゝ
清き空氣や日の光
善き汁液を造り成し
知れよ閉けき氣候をば
幹よゝあらで軟のき
森を此世よたとふれば
來れ童はべのたはらふ
花よ戯れ啼く鳥も
如何なる事を告るやを
思慮を巡らし智を竭し

臨むごの如き心地せり
照らすあさひも汝等の
されど我等は心中ゝ
寒き雪霜ふりよけり
如何よ苦きとあらん
後ふり向も憂さはのり
闇の夜中よ異あらぎ
いと美はしき緑り葉よ
其作用を施して
幹と枝とを養ふを
うけて早くも感そるゝ
緑の葉よてありぬるを
葉ゝ童はべよ比ぶべし
のどけき天を吹く風も
汝ごの清きこゝろゝ
我耳近くさゝやけよ
我等ごの成せる業とても

（新体詩歌四十九）

我等ごの書ける文とても
汝ごの面の樂ーさゝ
人の賞そる詩や歌ゝ
完全無虧の汝等よ
汝ゝ生ける詩歌あり

○社會學の原理ゝ題そ

宇宙の事ゝ彼是の。別を論せぎ諸共よ。規律の無きゝ有ぬのし。天ゝ懸ける日月や。微のよ見もる星とても。動くゝ共に引力と。云へる力はある故ぞ。其引力の働ゝ。又定まれる法ありて。猥りよ引はる者あらぎ。且つ天体は歴廻れる。行道とても同じと。必ぎ定まりあるもはぞ。又雨風や雷や。地震の如く乱暴よ。外面ゝ見もる者とても。一よ定まれる法ゝあり。野山よ生ふる草木や。地をはふ虫や四足や。空翔けりもく鳥類も。其組織より動作まで。都て規律のあるものぞ。又萬物ゝ皆共ふ。深き由來と變遷は。あらざる物ゝ無ぞのし。鳥けだものや草木の。別を論ぜず諸共よ。親よ備はる性質ゝ。

汝ごの様のかゝもさよ
比ふるとのあるべきや
世に數多くあるゝれど
及ふへき者あらぎのし
他ゝ皆死よし言葉のみ

、山仙士

遺傳の法で子ゑ傳へ。適そるものゝ榮へもき。適せぬものゝ衰へて今の世界ゐ在るものゝ。桔梗かるゐや女郎花。梅や櫻や萩牡丹。牡丹ゑ緣の唐獅や。菜ゑ葉ゑ止まる蝶々や。木の間ゑ囀る鶯や。門邊ゑあさる知更鳥や。雲井ゑ名のる杜鵑。同じ友をゞ呼子鳥。友を慕ひて奥山ゑ。紅葉ふみわけ鳴く鹿や。譯も分らで貝の音ゑ。追はれ体てあゆむ牛羊。羊ゑ近き猴ゝまだ。愚なとゑ萬物の。靈とも云へる詩人とても。今の體も腦力も。元を質せゞ一樣ゑ。一代增ゑ少しづゝ。歌積み重ねれる結果ぞと。今古無双の濶眼で。見極めたるゝ是ぞあれ五アリストートル、ニウトンゑ。優ぢそも劣らぬ腦力ゑ。グルウサン氏（十の發明ぞ。是ゐ劣らぬスペンセル。同じ道理を擴張し。化醇の法て進むのゝ。まのあたりみる草木や。動物而已ゐ非ぞして。凡そ有としある物ゝ。活物死物夫而已ゐ。有形無形夫れ〳〵の。區別ゝ更ゑあゐりしを。眞理極めー其知識。感ぞるも尙ほ餘りあり。されゞ心の働も。思想智識ゑ發達も。言語宗旨の改良も。社會の事も皆都て。

同じ理合のものゐれゞ。既ゑものせる哲學の。原理の論ぞ之ゑ次ぐ生物學の原理やら。心理の學の原理をゞ。土臺とゐーて今更ゑ。社會の學の原理をゞ。書ゑものさる〳〵最中ぞ。此書に載て說ゐる〳〵ゝそも社會とゝ何ものぞ。其發達ゝ如何ゐるぞ。其結構ゑ作用ゑ。社會の種類如何なるや。種族と親と其子等の。利害の異同如何なるや男女の中の交際や。女子ゑ子供の有樣や。取扱の異同やら。種々ゐ政府の違ひやら。違ひの起る源因や。僧侶社會のある故や。其變遷の源因や。儀式工業國言葉。智識美術や道德の。時と場所との異同よて。遷り變りて化醇そる。其有樣を詳細ゑ。論述ありて三卷の。長き文ゑぞせらるべき。最も目出度美學ゑこそ。既ゑ出てゐる一卷を讀ゐる者ゝ誰ゐりて。此書を褒めぬ者ぞゐき。實ゑ珍らしき良書ゐり。社會の事ゑ手を出して。何から何とせわをやく。責任重き役人や。走り書やら空しやべり。舌も廻らぬくせゑして。天下の事ゝ一と飲みと。法螺吹き立て利口ぶる。新聞記者や演說家。此書を讀て

思慮あさば。人をあやめる罪とごの此。少しい減りも爲あらん。月日の事や星の事。動植物や金屬や。夫等の事いさて置きて。凡そ天下の事業い。疊一枚させばとて。足袋を一足縫へばとて。長の年月年季入れ。寢る眼も寐ぎよ習とねば。出來る事よい有ざるふ。獨り社會の事計り。年季も入らぎ學問も。するよ及ばぬ譯あれば。新聞記者や役人と。成い最と最と易けれど。箇やうあ者ご多ければ。忽ち國よ社會黨。尙ほ恐ろあき虛無黨の。起るい鏡ゐ見る如ー。揉めよ揉めゐる其上句。虻蜂取らぎの丸潰れ。秩序も建たぎ自由なく。泥海にこそあるべけれ。再び浪風靜まりて。太平會と成る迄い。百年足らぎ掛らんい。革命以後の佛蘭西此。有樣見ても知られゐる。そこゐ心ご付きゐらば。安よ手出しをる勿れ。安ゐあやべると勿れ。廣き世界の其中よ。恐るべきもの多けれど。盲目同士の戰に。越しゐる者い有ぬのし。覘ひきまらぬ棒打の。仲間入りこそ危ふけれ。今の世界い旋風。烈しく旋る時ゐるご。烈ーき中へつい一寸。絡き

(新体詩歌五十二)

迄まれたら運の盡。足も据はらぎ瞑眩(めくるめ)き。頭いいとごぐら付きて。廻々(くるくる)〜と廻されて。透間も非ぎ廻はされて。上句のはてい空中へ絡き上られて落されて。初て悟る其時い。早遲蒔の唐椒。後悔先きよ立ぬあり。颶風烈ーく吹く時い。其吹く中へ過ちて。船を入れぬご楫取の。上手とこそい云べけれ。政府の楫を取る者や。輿論を誘ふ人たちい。社會學をい勉强し。能く愼みて輕卒よ。働のぬやう願はーや

(新体詩歌五十三)

○遊墨水歌

飯田武郷

隅田川。堤の櫻咲みだれ。みだるゝ盛咲にほひ。匂ふ遠近梢よい。雲をあびかゝ木蔭よい。雪こそつもれ見渡の。筑波の山い春霞。のそめる空よほのゝと。半みへその水上の。舟の帆影いはあれて洲を早くはあれて目の前ふ。近付よけりとりよろふ。氣色をみれば波の。音ものどけく行水の。かばかげも靜のよ自ら。心おちゐておもしろゝ。遊ふ此日の暮すもあらぬの

皆人は心ひらけて隅田川遊ふ盛りを花もさるらん

○詠和氣公清麻呂歌　　久米幹文

八隅しし和期大王の見したまふ夢のひまよりぞ濁る。弓削の川波おほけなく。逆のほらひてのふぞ。そる高坐山の高峯をもひたし汚せば。此世ハ海よやあらむ人ハ皆魚よやあると天の下。なけのふはしよ廣幡ハ八幡は神は神憑り。我國はしも天地の始め時と上下の。ことわり正し。くゐたふれ。穢きものハ神逐ひ。はらひそてよ打罰め拂ひそけよとたゝ告よ。のらし給へハ大淳言。いゐゝく臣は おほれむ事も思はぞ沈まむ身をも忘れて畏と歸奏せば。長いのゝ夢ハ覺て惱ましきみ心うせめ逆卷水速けれど。立騷ぐ波高けれど。大淳稜威ふ爭そひゐねて末終よくたり落たり其臣の功ハ高く其臣の。名さへさやけく後世の。鏡よせむと稱め給ひ。治めたまひて神とさへいはひ奉らす事の尊とさ

君こそハ水附屍と弓削川の逆卷波をたゝ渡りつれ

新体詩歌第四集

○虞禮氏墳上感懷の詩　　尙今居士

山々のそみいりあいの。鐘ハなりつゝ野の牛ハ。徐よ歩を歸り行く耕へる人もうちつゐれ。漸やく去りて余ひとり。たそゐれ時よ殘りけり。四方を望めば夕暮は。景色ハいとゞ物寂し。唯この時よ聞ゆるハ。飛ひ來る蟲の羽の音。遠き牧場のねやよつく。羊は鈴の鳴る響。猶其外よ常春藤しげき。塔よ宿れるふくろふの。近よる人をそのー見て。我巢よ寇をなそものと。訴へんや月よ鳴く。いと哀れよも聲をあり。かしてよハ楡又こゝよ。あらゝぎの木ぞ生茂る。其下のげようづだのく。苔むを土の覆ひゐる。坑よ埋まれこの村の。古人長く打眠る。軒は燕も雛も。木魂よ響く角笛も。朝朗けよぞなりぬれば。囂すしくハありつれと。冥土の人の眠をば。覺そとこそゐのりけれ。死よたる人の果敢なさよ。身を暖むる爐火も。妻のよゐ

べも誰爲めぞ。愛るわらべごのかたとよ。爺の歸りをよろこびて。小膝よそごる事もあり。曾てこの世よ居し時ハ。麥も小麥も其鎌よ。山も畑も其鍬よ。手荒き馬も其鞭よ。繁れる森も其斧よ。任せて君が儘ありき。功名とても浮雲の。過るごの如きものなれば。この古人の世の益と。骨折するも不運をも。詫しき妻子の暮しをも。笑ふへきよハ非ぞのし。富貴門閥のそならぞ。みめ美くしき乙女子。浮世の榮利多けれど。いつの無常の風吹のハ。草葉ハ露もおろのあり黄泉よ入るハ外ぞなき。苦よ埋れし古人ハ。墓場の上よ寺を建て。餘りまばゆき屋の内よ。頌歌の聲に合すゐる。樂器の音を聞ぞとも。身の不德とな思ひそよ。ひつき肖像美を盡し。人の尊敬多くとも。一度ひ絶るし玉の緒を。繼き留むべき術ハあー。諂らふ人のほめ言も。長き眠ハ覺そまし。考へみれハ廢れる。此古塚の古人も。世よ優れたる量ありて。國を治むる德を具し。詩文の才も多けれと。顯れそして失せける歟。學ひの海ハ廣けれど。渡る船路を知らざれハ

心の性ハ賢こきも。身ハ賤しくて貧なれハ。世の譽れをハ聞ぞして空ーく部に終りけり。深き水底求むれば。輝く珠も有ぞのし。高き峯をハ尋ぬれば。鬱る木葉の多けれど。千代の八千代ハ昔より。人よ知られで過よけり。實よ此墓よ埋もれて。業ハ劣るもハムデンお詩ハ拙くもミルトンよ。國お軍を擧そとも。タロムエルよ比ぶべき人ハ屍やあるあらん。議院ハ議士を服さーめ。人のおどしも外よ見る。國の安危を身よ委ぬ。高き譽望を民よ得る。此等の業ハおーあべて。古人何ぞあづのらん。惠みハ廣く及はねど。又常々のふるまひに。不德もいとゝ少あしや。人を殺ーて王となり。民を惱めて利をあさす。夢よも見まじ去るとハ。誠をのくそその言よ。恥るを忍ぶ心の苦。且つ巧そなる詩文もて。富貴よ媚る世の習。是ハ都の弊あれど。未だ此地よ及ぼさぞ。此所よ生れて此所よ死す。都ハ春を知らざれバ。其身ハ淨き蓮の花。思ひハ清める秋の月。實よ厭ふべき世の塵の。心よ染そし事ぞあき。されど收めし屍のらの。記るし

の爲と側近く。建し石碑に今もあり。文に拙く彫りざまに。醜しとてもたび人の。憐を爭で惹のざらん。碑面に彫る名に年齢に。記し〻文字に拙くも。記念は巧に有ぞのし。又有ごのたき經文の。文句を引てにりたるに。人ふ無常を諭を爲め。蓋し此世に生れ來て。程なく死を其時に。別れの惜しき事もなく。浮世の花の榮にをび。心の外に打捨て〻。去行く人にあるべし。眼の光り止むときに。戀しかるらん身は族ら。魂〻ひ体を去る時に。痛く慕はん妻子とも。たとひ燒くとも埋む共。人の思ひに消ににせじ。偖又此に古人の。謂れに書けど余とても。いつの歸らぬ旅に立ち。過ぎ行く後に世の人は。如何せ〻やと思ひやり。尋ぬる事も有あらん。志あらん時に此先の。頭ふ霜を重ねたる。老人斯くぞ曰ふあらん。我儕(わなみ)に彼れごの朝早く。昇る旭を見ばやとて。岡に登るを常に見き。又彼處なる川端の。枝伸びの垂し山毛欅(ぶな)の木は。蟠のまりたる根の側に。身を横たへて畫いこひ。流る〻水に打臨み。其常あきをあこちてん。又彼處なる常葉木の。木立の下ふさまよひて。頭ら傾け腕を組を。知る人あさは歎のしき。屆のぬ戀の口惜しさ。世のうさ抔を喞ちけん。去るに一日に彼の人を。慣れし岡にも樹陰にも。絶て見る事あかりけり。其翌朝にありぬれど。野にも森にも川邊にも。身を現はそ事ぞなき。又其次の朝ぼらけ。志のばね送る歌きけば。正しく彼れの爲なりき。君に字を知る人なれば。彼の山梔(さんぐ)の陰にある。碑文を讀みて識り給へ

碑文

五土を枕しこの下に
身をのくしたる此人に
十富貴名利もまた知らぬ
學ひの道も暗けれど
(九哀れ此の世を打捨て
あの世の人と成にけり
仁惠深き人なれば
天も憫み報ひけり
憂き人見れば涙ぐを
(外に詮そべなき故ふ)
獨りの友の有ーとよ
(外に望はあかるらん)

是より外に此人の尋るとても詮はなし後の望みをいだきつゝ

○小楠公を詠ぜるの詩

（新体詩）

嗚呼正成よ正成よ
黒雲四方にふさがりて
悪魔の天下を横行し
歌慢ぶり果てゝ上とせぬ
六絶る間のなき人馬は音
芳野の山に花見むと
（十君ぞの浮代こそ千代々々と
いづれの時に有なるや
嗚呼大君の浮為に
この世の塵を洗はばと
遠くあなたを見渡せば
雲の上まで屹立し
善し悪し共になほ深く
たましひ既に天に帰し
神にまちぞく侍るなり

公の逝去はこのたゝ
月日も為に光りなく
下を虐げ上をさへ
吹き来る風も醒ぐさく
春も来れども花咲のす
訪ひ来る人も絶てなく
囀る鳥の聲聞も
嘆のはきの至りなり
振ひ起りてけのれたる
ぞる人とても非ざるの
金剛山も巍峨として
繁る林の木の間より
見ゆる菊水は其旗の
父の賜ひし此刀
賊の頭らを斬らせむ為
國は仇なり父の讐
拂へも来たる夏の蠅
熟ら思ひめくらせば
若しも病に冒されて
不忠不幸と誹られむ
死出のおごりに今一度

（新体詩）

歌

君の浮影を伏し拜
六聞て切なる胸のうち
十書き残したる梓弓
（一誓ひし者も百餘人
物ともせぬに斬まくり
討死せしいさぎよく
都も遠き村里の
忠臣幸子の鑑ぞと
天地と共に傳はらん

実にこそ國の寶なり
腹をきれとの為あらぞ
憎さもにくし彼は賊等
斬て捨ぞよ置くべきや
頃も正平戊子の春
元来よわき此のらだ
空しく失せし事あらば
討死せるも此時ぞ
願ひのあひて親面たり
生て飯れのことはれり
哀れといふも愚のあり
引きてかへらぬ赤心を
雲霞の如き大軍を
君の方をば枕して
勇ましのりける事共あり
女わらべに至るまで
譽る其名も香しく
天地と共にあつたばらん

○代悲白頭翁歌　大竹美鳥

都の錦桃櫻。花の色香の日よそへて。移ろゐて行く乙女子ぞ。散り行く花を打眺め。露の命の果敢なさを。あこつもいとど哀なり。暮れ行く春よ花散りて。木々の梢い緑りしぬ。眺め見あのぬ我心。又來ん春を思ひやる。花い今年ふ變らねど。身の行末ぞ忍ばるゝ。常葉の松も杣人ぞの。斧ふふるれば忽ちよ。賤ぞの伏家の薪ぞり。桑れ畠も年ふりて。青海原よありきてふ。事さへ人の云ふぞあし。過ぎし春の曙よ。花見一人ぞ今いるき。今もてはやす諸人い。行衛も知らぬ花の風。風を怨みて中々よ。身の古行くを思はさり。春毎よ吹桃櫻。色も同じく香も同じ。今年も去年よ變らねど。變るい人ぞ姿なり。今年い去年より古よたり。又來ん春い如何あらん。如何よわれらい言告ん。我も昔しい汝ぞの如き。花の顔月の眉。今い頭ふ霜おきて。哀れ翁よありよけり。哀れ汝も亦心せよ。幼けあのりー其日よい。木の下影ようちむれて。戯れ遊ふ舞の袖。風よ散行く花れ色。光り輝く高樓よ。天津乙女の歌ひして。樂しく暮ぞ月と日の。流れぞ早き飛鳥川。昨日れ淵を今日とれば。瀬よ變りもく我恋。病の床よふー柴の。戸ぼそを叩く人ぞあき。花の顔月の眉。うつろゐてもく世の習。緑れ髪を今日見れば。越の國なる白山の。頭い白く青柳の。腰い梓れ弓あれや。過よし事を今更よ。思ひ出れば中々に。千々よ物こそ悲しけれ。入相告る鐘の聲。塒ふ歸る村雀。實よ常なきい世の習ひ

（新体詩歌六十二）

○寒村夜歸　山川健次郎

草木も眠る丑三を　あれし道とて只ひとり
遠寺の鐘の音凄く　小笹を渡る夜嵐の
我を襲へる九折　登るも暗らき杉村を
洩來る月の片われい　何地ありけん梟の
聲より外よ友もあー　斯る淋しき土地あれど
住めば都の闇ぞーき　車の塵もあゝらねば
權貴の門よへつらひて　名利よ追はれ牛馬よ

（新体詩歌六十三）

まけぬ重荷を負ひ擔ぎ
我と我身よ使はるゝ

苦痛はさらで春の花
夏い螢や郭公
秋い鹿は音月雪と
四時をり〳〵の景物を

我もの顔よもてはそぶ
身い昭代の棄材ぞと
自らもるし友も亦
飄一ッよ王公や

貴人も知らぬ快樂の
多き此身を神よ謝し
謳へば返そ谷の山彦

(新体詩歌六十四)

大竹美鳥

○西詩和譯

此詩原ブレットハートノ作ニシテ僅々三章一百字妙味蓋シ言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナルヲ以テ原詩ヲ推スヿ勿レ

暴風よ雨を吹きませて
海面さこそと思はるれ
今日い漁業休みゐん

最もさましき聲すゐり
岸うつ波の音高き
鳴呼畏ろーき聲斗り

右一章

獸は踪を尋ねんい
岩間よ哮る獅子もあれ
今日い山獵休みゐん

いと〳〵難し今日の空
谷間よ嘯ぶく虎もあれ
鳴呼畏ろしき聲斗り

右二章

海ゐ幸ある舟子ども
市よ飯ればこい如何よ
此所も彼所も怪我人の

山よ幸ある獵男ども
さきの地震よ家つぶれ
鳴呼畏ろしき聲斗り

右三章

(新体詩歌六十五)

○詠史

武士の石すゑとまもたゝへつゝ。其名かれせぬ楠の木の。やまと心のくりなく。君よつゐへて國のゐめ。あゐのさゐ山ゐたてこゐり。あるい千早よ吹おろそ。おろしは風よゐたきらは。たまりもわにぞちり〳〵と。散行きよけりつゐの木の。いやつき〳〵にうちよせて又引ゐへし攻め來れば。今いゐのぎりよ死ゐばやと。心極めて櫻井の里よかほれる言は葉を。子よ敎へつゝのこー皆。其身はやゐてつはものを。うちまたゐへて湊川。そこをふゐみて赤心よ。謀りー事もあわとゐり。酒にて戰の敗れとる。豫てかくぞと空よ滿つ。倭心いさを野の。花と散〳〵憐れさを。早くも仇の傳へ聞き。暫時しまど

るむ夢をさへ。驚のあんとむらきもの。心をつきて君ゞ爲。盡を心
いなゆみあく。家よ傳へしをとらしは。梓の弓のなきのぞよ。いる
てふ事を記るゝ置。吉野の山よのほれるゝ。實よたぐひあき丈夫の
親子はらのらのこらぞも。國を枕よなしてける。赤き心を今も世よ
傳へ聞くだゝ身もさふく。ありよけるのも適ハれますらを

反歌

古志へをさゝくまれけり湊川世に流れぬる名を慕ひつゝ
世を經つゝ朽せぬ名こそ楠の石とゐりぬる記ゝありけれ
元治のはじめの年都ゝ事ありしより此の爲公のおほん爲ゝ命う
しあひゝ人々の祭り行ふとて讀める

○吊忠魂歌　　從三位毛利元德

あゝあへて。過よしあたの年よめゞ。十あまりみつのそのゝみの。
空よあやしき雲おこり。大内山を立こめて。光りさやけき天つ日を
おほひ曇らしとこやみと。あせるを歎き我いへよ。つゝへし人ら赤

心に。おもひはかりてもとかしい。もとのとくよ九重の。雲井の空
をさやかよゝ。拂ひてしかと言ゑてゝ。うち出しものを其ことの。
ならそてつひよその人も。都の野べのあら露と。消よけりゝもその
身はゝ。きへ果ぬれとぼどもあく。其人とものはりつる。事の如
くよいよしへよ。大まつりことのへりつる。もとをたどりて。あわ
れ〳〵此人とものの大君の。おほみためそと玉きはる。命捨よしゐた
ちより。あれりとものへは已れらゞの。あく明らけき大御代の。みいつ
くしをよあふことゝも。この人とものの國のゑめ。のこゝ置つるいさを
しと。千歳のゝちよのたりつのまゝ

反歌

雲晴てさやけくあれる天つるをあふぎもあへぞ失ゝ人はも
あだ波をのへゝもやらて徒らよ屍ねみつきゝ人ぞかあしき

○世渡りの海

山川健次郎

宜も出來たり實りゐり。往來の人も稻のゐみ。わけて今年の秋穫を見れば農ほどよき業ハ。又とあらしな國本も。こゝゐ基ゐし民命も爰よゐゝると聞からよ。劔をうりて鋤をゐひ。そき返しても長き日は。腕も肘もぬけさうよ。それのをならぞ霖雨や。旱に水のゐけ引や。夜の目も寐ぞよ引板は番。さるよ一日野も山も。野分の風の無慙やな。泣くよもゐけぞ取分て。世は常ゐきを喞つより。外よ詮術なゐりけり。嗚呼六づゐしは世渡や。物うる業ハむゐしこそ。賤しといへど今の世ハ。國の光も身は幸を。もとむる道もこの外よ。非じときけば矢も楯も。はや溜らじと投げ捨て。輸出輸入は平均や。彼ゐ得られし商權を。取もどさんと健氣ゐる。胸算用の正鵠ハ。あへなく外れ幔幕の。設け處ぞ埒もなく。賣れば借られ買へば損。杖と頼をし資本も子も。きへて果敢ゐき雲霞。あらしの庭は花紅葉。世は常ゐきを喞つより。外よ詮術ゐかりけり。嗚呼六づゐしは世渡

や。棹一本よ浮々と。此所の泊りや彼所の港。遊びぞのてらよ渡らるゝ。舟子も暴風の危險ゐり。危險を怯ぢぞ畏れぞよ。名譽の海ゐ乘り出し。日頃の伎倆顯とすハ。いと易けれど夫とても。よるべき蔓を求めねば。よゝ覓むとも其蔓も。其よ根ハゐきうき艸の。憂き艱難をよそよ見て。誘ふ人なき身の不運。はり裂く胸を押鎭め。月よ嘯き花よ醉。流るゝ水を友として。世の常ゐきを嘆つより。嗚呼六づゐしの世渡や。世わたる業ハ多けれど。彼よ利あれば此よ害。つきて廻るは諺ざの。畔を走るも田を飛ぶも。おゐじ羽色の蝶鳥ハ。おろゐな事よ細虫そら。其生活は習ふより。ゐれし手業を怠らぞ。傍目をふらぞ一そらよ。明日ハけふより明後日ハ。又ゐそよりと工夫して。祖先の立てし計畫と。其熟練の遺傳とゐ。光りを加へ漸くよ。勵み進めばおのぞゐら。我を志らづよ一日より。一日と樂よ傍目より。羨むこゐをきく時ハ。嗚呼いとやその世渡や

○夏夜即事

山川健次郎

畫の暑さいもふ立よ。あらひ流して峯高く。のゝやく月に置わたす千草の雪のはら〳〵と。玉を欺く玉たれの。小簾の返しよ吹ちりていとも涼しきむら竹の。葉越ゝ秋や來ぬるかと。疑ふばゝりおと細く。庭の筧もきこもなり。千ひらの金と一刻を。惜みし春の宵より

新体詩）も。猶明け易き夏の夜の。價を誰のさだむべき。口さのゝくも愚のよも。夏いうるさし又暑し。蚤蚊や蠅と打つけよ。貶ていふはいはぜして。おもひを焦す螢火や。昔の人の袖の香を。志のゝ軒端の橘

歌よ。はつねをもらす郭公。訪ふ人もなき宿の戸を。叩く水雞にやぶ七らるゝ。物の哀れをもめゝふだよ。志らで寢過す人ゝらん。靜よ觀れ

（十ば四ッの時。うつり變りて物ごとよ。われを慰さめ樂しまそ。深き方便をもくりなく。今日のあたり覺へたる。其時ーさと樂しさを。つゝむとそれど夏衣。吹返しゐる峯の松風

○送學友歸鄉歌　大竹美鳥

五年六年諸共よ　同ー學びの窓の面よ

互よ勵みはげましつ慰められつ慰めつ

光のどけき春の日や月のあげ清き秋の夜や

五月雨晴れぬ夏の日も雲ふりまける冬の夜も

いとゞ樂しく過ーけり いとゞ樂れしく暮ー鳧

新体詩）月日の流れ早くして五年六年とく立ちて

昨日諸共住みなれし學びの舍を出たりー

明日ゝ旅路よ出船の ともなり師ゐる君達の

かーまだち今祝ふゐり 祝の酒をそゝむなり

いざやほせ〳〵其酒を いざやくめ〳〵其酒を

歌）歌へや舞へや皆共よ 舞へや歌へや諸共に

今日を限ぞ明日よりゝ 又逢ふ事の易きやゝ

七敵といふゝ忌言葉 雲をも排く心あらば

十難きも難き事ゐらぞ 月れ前もくほとゝぎす

（一聲をゞ雲井よ上るゐる あれ見よ高く上るゐる

さはいへ心有明の 月影のくそ村雲の

行衛思へばうたてやゐ 浮世の事よ似たる哉

朝ゝ淺間の烟りゐも 暮ゝ鞍馬の霞をゐも

天と地との間をゞ 家とゐしつゝ過る身ゝ

隔てゝゐらじ西東 北も南もみな同じ

同じ團坐の友人よ
浮世は事ゝ何事も
さりとて心おくらるる
斯くして後よ思ふ事
風ふき拂ふ雲間より
雲よあやめる月を見よ
思ふまゝよいならぬ共
耐へよ忍べよ怠るな
あふ者とよ見よや人
月ゝ出たり顯れたり

嗚呼面白の景色やな
明日の別れの最つらき
取れや人々酌む酒の
深き契りを忘るなよ
月もろ共よやそらいで

そぞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉ぼゝき
つきぬためゝも有磯海
寢ぞもあれや今宵一夜
歌へや舞へや明るまて

○見二燭蛾一有レ感

時ゝも夏の闇の夜ゝ。文書のんとて我庵の。東の窓の其下あ。燈と
もせば庭の木の。涼しき風を送り越し。衣を通しふくよつれ。いと
美しき蝶々の。飜めき來り[illegible]みて。取らまくぞそる有様を。見れゝ
悟の有磯海。深く心よ藏め置き。守らんとする事ぞある。抑も難を
企つゝ。惡きとよゝあらねども。又其本を見ざりせば。今しも來た

犬山居士

りし喋々の。等しき業やあそならん。燒ても思ふ其火をば。取まく
そるゝ愚ならぞや。死しても難き其事を。なさまくそるゝ愚あり。
其身ありてぞ事遂ぐる。其身失せては遂ぐのたし。されば撓まぬ心を
ば。まめて其身を燒もせぞ。死しもあさぬ道をとり。進みて後よほ
まれ得て。後に鑑を殘そべき。名譽の人と呼ばるれん。名譽ぜ人と
呼ばゝれん

鈴木劵太郎

○湘南秋信

昨日けふと思ひしも。早一月の旅衣。旅よいなれぬ苦ゝさよ。眺む
るものゝ空の雲。雲の通路斷ぢぞとも。斷ぢ〳〵なるゝ文の面。あ
そゝ來ふけん友便り。あさてゝ又親や妹。偶よゝあれど其さへも。
惡事のけてゝ何ものも。有る者とてゝ無りけり。まいて王子ぜ紅葉
だも。いのよ見物の其とても。想ひやるのを詮術も。泣よあのれぞ
兎や角と。案じ暮そゝ愚かゝも。知るや知らぞや秋の霜。千卿よの
ゝり照月も。哀れを見舞ふ氣合なり。木ぜ葉の落る音づれも。ある

は馬入ふ馬を侶。まゐい雨降よ雨に拭。大和心のやる瀬なき。思案なげ首池の鳧。都の人にまらせんも。外ふいあらじ是いそも。今年のみのり豊けさよ。民の命のこゝろ紐。來るや春の事までも。嬉しく思ひ云まくも。君ゞの代なれや有ゞたし。白きを語る丹き肝。田舍の住居よし然ゐも。露の恵それ深さよも。酔て管まく其代り。東京の摸様知らせゐも

蠣民評云。句精功。押韻自在。敬々服々

蠣民評云。句精功。押韻自在。敬々服々

○チャールリス、キングスレー氏悲歌　外山仙士

無常を告ぐる入相の。鐘の音そるたそゞれよ。三人の漁夫ハ帆を上て。入る日を指て西の海に。走らす船ハ進めども。妻子の爲よ引ゐさるゝ。心の中ハ皆同じ。父の出船を眺めつゝ。沖ぞ向ひて行める。童子ハ外ふ餘念ゐし。まうけハ薄く子澤山。雨の降る日も風の夜も洲よ打掛くる涙ぬ音。最とすさまじき其時も。稼ゞよやならぬ男の身。袖のひぬのハ女子の身。三人りぬ漁夫の妻三人り。日も西山よ

入相ぬ。鐘もほのゐよ聞もれバ。共に籠りし燈臺の。火を挑んと立寄りて。つまめる心の夫思ひ。窓の戸開けて眺むれば。驟雨やら暴風やら。空打過くるむら雲の。色黒々と物そでし。暴風ハ如何よ吹けばとて。水嵩ハ如何よ増ばとて。洲よ打掛る涙音ハ。如何程そでく聞ばとて。稼ゞよやならぬ男ぬ身。袖ぬひぬのハ女子ぬ身。朝日かゝやく砂磯よ。潮引き去りて其跡ふ。殘るハ三つの屍ぞ。一人りの漁夫の妻三人り。皈らぬ旅よ門出して。皈らぬ夫のゐきゞのよ。髪振り乱し取そゞり。消る計りよ泣き入りて。日よ當られぬ風情ゐり。稼ゞよやならぬ男の身。袖のひぬのハ女子の身。一日も早く世を去れば。一日も早く樂をせん。屍の跡の砂磯よ。寄せ來る涙の碎けつゝ。鳴り瀧や鳴れよるゝ儘よ

○佐久間象山の謫居の歌　佐久間象山

信濃路ハ。ひゐよハあれど。うらくはしやまよものよ。ばるされバ。はゐさきをまり。秋つけは紅葉にはへり。そをめでゝのもき山もき

あまつ日の。くるゝも忘らぬ遊ぶあり。人もさはあり。去のれども。
さそらふるこゝ春の野に。花もものざゝぬ。秋山の。紅葉をも見ぬ。ゐ
ちちねの。はゞのかふこの。まゆごもり。こもりてあごの。年ぞ經よ
ける

反歌

君ごのゐめ　一りせむそべをゐこあたら齡のおいらくをゝも

〇西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

久方の。空ゐ長閑よ。あら玉の。春を迎へて。秋津島。風も靜よ。祝ひ
つる。程々あらせぬ。武士の。八十氏川よ。立さわぐ。波のよるひる。
とまあく。君ゝ臣を引連れて。臣ゝ君よも從ひて。軍の庭よ。魁の
けて。打つ討れつ。そごのあかよ。實よいやましき。大丈夫の。わのき
はらのら。二人りづれ。向ふ矢庭よ。飛くるゝ。雨か霞の。白瀧に岩
をも碎く。黒鐵に玉よ當りて。はらのらゝ。世よあき人と。ありよき
と。古郷人ゝ。傳へ聞き皆打守りて。歎きゐる。折りし事なく。歸り

來てめぐり逢瀬の。ありけるゝ。まそらゐけをの。潔ぎよき倭心を。
志ろしめぬ。弓矢の神に惠まて。いさをゝ世々よ遺すあるらん

反歌

くろごのねの玉もとほらぬ大丈夫ごの君よつのふるやまと心ゝ

〇詠石菖歌　滋野貞融

おほよそもの御國よありあごのらこゝの名ゝあく漢籍ふ見にたる
その名をもちゐるたぐひのぬをそくあのらぬなむ所る石菖ゝゐゝ
のひとつあるべしのゝるゐぐひゝ文詞よこそ石菖あどのきもを
れ歌詞よゝよむべきならねばそのたぐいよつきてあやめ草とい
はむのらよたれあらぬとしもいひてうべなゝざらむ志のはあれ
どあほまぞれぬべければそのいはほよおふるよつきて私よ名づ
けて岩あやめといふそのうへのしてよ緣劍眞人また劍菖草あど
いへるもおかしければこゝよりまた此名をつるぬ草とやいはま
一山本春香石菖をおくれり字を正宗といふこれなむわごの家の正

宗ありけるのくいふハ天保八年水無月

古の道踏學ぶのたはらよなよ手ハなさむつるぎたちとれバをふし
くそのにほひみれバおゝしく村肝の心ハもきぬ神代よりこのつる
ぎたちつくるてふ人ハおほけれ人の世のよハ末なごら鎌倉の正宗
こそハ此道の聖(ひじり)ありけれそのおしへうけつのひてし義弘ハ亞聖(ひじりにつぐ)
則重ハかしこのりけりわご家よもちつゑへよし義弘ハ作れる太刀
ハわのゝりしほどのをさびよつくりつるもれよしあれバ此道の物
識人に志めすべきもれあらるくゐわれひとりめでゝこそあれ源の
はるのの子とふみやびをごのもちつゑへにし則重ごのつくれる太刀ハ
むのゝこの川中島よますらをの名をとゞめたる山本の老翁(をぢ)ごもの
かも遠祖(とほつをや)の名代とあごのめ今の世の人よ志めせりわれさへもをれバ
うるはゝうるはゝきわごのはらのられたへつるその則重とわごのも
ゐるその義弘もはらのらのつらよゝゐれバこの子らご親とゝきこ
へ此道の聖といへ正宗ごのつくれるこそハもめよだよ見まくほりす

れいのよして見るとを得むいのして手よハふれむとつねにしもお
もへるをのご心をば志る人ぞ志る窓の内よそのひめもゐる岩あや
め草ハおほけれいつのよよいかゐる人のすさびよの名を正宗とた
ゝへけむつゝきなゝゐるつるぎ草われよおくれりむなかたハ緑ら
ごしくばごのたハもしろくにほへり朝(あした)にハ眞清水ゐゝへそのさまの
にほふをぞ見る夕ざれバとゝもゝびのゝげ其つゝの玉をこそ見れ正
宗かそハ志らねども末の世のすごのたよハあらぢこれを見る我こゝ
ろこそみな人の得ごのてよそとふ正宗を得しこゝちなれ枕大刀たち
よゐらべていよゝへの道ふみまなぶかたはらよこれをゝおきてつ
ねよのも見ん

新体詩歌終

新体詩歌跋

登レ高必從レ低焉行レ難必從レ易焉故治二天下之事物一必有二順序一々々何那日當下行二事物一之日上不レ可二必欠一者恰如下涉二河海一必用中船舶上也夫助二國家開明一進二人智發達一則在レ于レ學矣顧レ然學有二難易一故初學脩レ之隨二其順序一從レ易及レ難而勉レ之則易レ覺而易レ學也然余觀二察當時人情一百事唯期二速成一不顧二其順序等一直學レ難而措レ易所以其因難不レ可レ言於レ是可遂半途而挫二折其志一不レ達二目的一者甚多矣譬若レ登二樓子一逆レ序隨レ段而不レ蹈レ之直將三飛越達二其上一則有二陥墜之憂一而無二上達一焉夫然然則豈焉得レ爲二國家開明進步之稗益一哉方今我國行二民間一彼俚歌俗謠是其最易々耳兒童謠レ之走卒誦レ之而猶感二發人心一不二鮮少一矣然亦レ有下我國翻二譯泰西之詩歌一而公二世焉是余等所三常爲二遺憾一也今也竹内君有レ志レ于レ此蒐下集係二諸大家翻譯一之泰西詩歌與中我本歌上而名曰二新体詩歌一既有二第四集之編一焉今又第五集編成示レ余且徵レ跋余受而誦レ之風調温雅能得二其体一而語甚不レ高一誦レ之解二其意一也而熟讀玩味則覺下字々有二慷慨一句々如二金玉鏘鏘音嫋々意味益深上長上篇而一章快二一章一讀未レ斗イレ覺扎レ案曰噫是眞天下之快歌也余前月レ詞俚歌俗謠猶感二動人心一不レ少然況於二此集一乎一流二布民間一則感二動人心一發二奮其志氣一而人々抱二道取之象一至下遂採二學文之深奥一以進中我國文明之度上昭々明レ於レ見レ火矣然則此集益二於世教一果幾許哉感激之餘聊述二鄙言一以爲レ跋

于時明治癸未八月上浣居交櫻陸居士

廣瀬要人識

明治十九年三月廿九日飜刻御届
同　年同月　出版
飜刻出版人　近藤音次郎
京橋區彌左衛門町七番地丸山方
全　坂本金次郎
京橋區銀座四丁目四番地
賣捌人　安井六藏
松岡藏書